須賀川市教育研修センターだより　第 92 号

「 み ち 」　令和元年１１月１５日 発行

学力とは何でしょうか

～新学習指導要領スタートの前に！～

来年度，小学校の新学習指導要領スタート。そして１年後には中学校の新学習指導要領完全実施。令和の時代の教育改革がいよいよ本格的に始まります。

新学習指導要領の改訂の大きなポイントは，知・徳・体にわたる「生きる力」を子どもたちに育むため，「何ができるようになるか」を明確化し，「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら，授業の創意工夫ができるよう，

①知識及び技能
②思考力・判断力・表現力
③学びに向かう力・人間性等

の３つの柱で，各教科の目標が再整理されている点です。

また，学ぶことに興味や関心をもち，自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら，見通しをもって粘り強く取り組み自己の学習活動を振り返って次につなげる学びが「主体的な学び」です。

続いて，子ども同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ，自己の考えを広げ深める学びが「対話的な学び」です。

さらに，「見方・考え方」を活用し，知識を相互に関連付けてより深く理解したり，情報を精査して考えを形成したり，問題を見出して解決策を考えたり，思いや考えを基に構想して意味や価値を創造したりすることに向かう学びが「深い学び」です。「主体的・対話的で深い学び」の構成要素です。

学習指導要領完全実施を前にしたこの時期だからこそのひとつの問いが生まれてきます。

「学力とは何でしょうか？　生きていく力となる学力とはいったい何でしょうか？」

「学力とは何でしょうか？　生きていく力となる学力とはいったい何でしょうか？」

教科書の知識だけの学力や，受験のためだけの学力ではなく，「子どもの心と身体に何を育てなければならないのか」ということです。

今年度，須賀川市教育委員会が推進している『授業と授業研究が第一優先』の学力向上施策は，この基本的な問いに裏付けられたものであることは論をまちません。学級のすべての子どもの学力を保障することは，学級の子どもたち一人ひとりの気づきや発想，考え方を大切にすることです。身に付けるべき知識や技能を習得させていくことばかりではなく，一人ひとりの子どもが「何をどのようにして学んでいくか」を見取り実現させていくこと，グループや集団の中で認め合い支えあう「協同的な学び」を体験させていくことも大切な学力となるのです。

教師には，一人ひとりの子どもの個性的な可能性の開発に力点を置き，常に子どもの姿の中に新しい芽を発見するみずみずしい感性と確かな目を持ち，また，日々の子どもの学びの事実をとらえ,それを身に付けさせたい学力と結びつけて考える教育観が必要となるのです。

台風災害とボランティア

10 月 12 日に到来した台風 19 号による被害は，予想をはるかに超えた甚大なものとなりました。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

東日本大震災に匹敵する被害という声も聞こえてきています。

橋本克也市長がメッセージで，「今回の水害は，甚大な被害を受けた地域がある一方で，幸いにも被害を免れた地域もあります。どうか，この難局を乗り越えるために助け合ってください。」と伝えてくださいました。

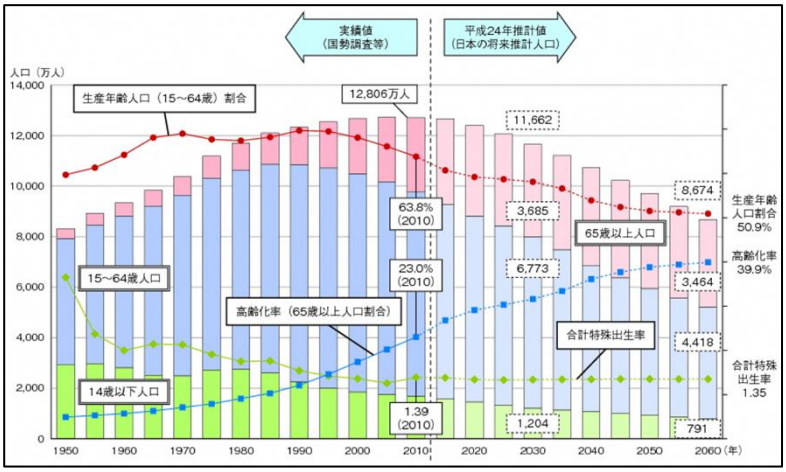
被害を受けた方々のために，友人・知人，そして多くのボランティアの方々が支援に入っておられます。

「困っている人のために自分には何ができるのか」，支え合い助け合う皆さんの姿を通して、子どもたちにも問い続けていきましょう。

日本チームから見えた“協働”の社会，そして，これからの英語教育

ラグビーワールドカップは，スポーツとしてのラグビーの面白さばかりでなく，“ONE TEAM”，つまり集団の中での崇高な仲間意識と役割意識，そして不撓不屈の精神等，選手の姿を通して様々なメッセージが伝えられ，私たちも大いに胸を熱くしました。そして，日本チームの構成メンバーが７つの国の国籍を持った人たちであったことは，これからの「チーム日本」を考えたときに大きな意味があったことと考えさせられました。

総務省から発表されている日本の人口推計です。2010 年に 12,806 万人だった日本の総人口は，少子化の影響で 2060 年には 8,674 万人に減少することが予測されています。32.3%減，つまり日本の人口が 50 年で 2/3 になるという予測です。



各地で人手不足の悲鳴が上がっていますが，人口減少社会に入り，生産年齢人口が減ってきていることがその理由であることは右のグラフからも明らかです。

外国人を積極的に受け入れて国の体制を維持する社会づくりが始まっています。子どもたちが生きる未来の社会は，それが日本であっても外国人と協働する社会となっていくことは間違いないようです。ラグビー日本チームは日本の未来社会のようにも見えます。

コミュニケーションの最大のツールは言葉です。英語を使って自分から積極的に意思を伝えること，互いに理解し合うこと，それが実現できるように，文部科学省は英語教育の早期化・超高度化を示しています。

１　小学校外国語活動導入・外国語教科化

⑴　３，４年で週１コマの外国語活動新設

⑵　５，６年で週２コマの外国語教科授業

○内容は現在中学校１年生レベルの授業

○学習単語は 600～700 語

○授業者は学級担任中心（ALT や外国語を使える人の協力）

２　中学校英語の高度化

⑴ 今の中２レベルからスタート

⑵ 扱う単語は小学校 600～700 語に加えて新語 1,600～1,800 語，合計 2,200～2,500 語（現行 1,200 語の２倍）

⑶ これまで高等学校で学習していた現在完了進行形や仮定法も学習

⑷ 中学校でも「授業は英語で行うことを基本とする」ことを実践

３　高校英語の大幅レベルアップ

⑴ 四技能統合型「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」＋スピーチプレゼンテーション・ディベート・ディスカッション中心の「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」に

⑵ 発信力強化の言語活動（発表，討論・議論，交渉等）を充実

⑶ 高校段階で 1,800～2,500 語の語彙習得を目的とし（現行 1,800 語），高校卒業段階では合計 4,000～5,000 語（現行 3,000 語）が目標

⑷ 授業は英語で行うことが基本

⑸ 入試制度改革